被服構成実習授業の取り組みについて一考察
－　ITを活用してデザインしたドレスを形にする　－

小　川　秀　子

Consideration on the practical training of dress construction
－ putting dresses designed by IT into shape －

Hideko Ogawa

１　はじめに

新潟青陵大学短期大学部人間総合学科は、改組以来2017年度で14回生を迎え、入学してくる学生は、教育課程表をもとに興味のある分野を自由に選択し、独自のカリキュラムを作成し、２年間の短大生活を送っている。なかでもファッションに興味をもつ学生が受講する、２年次開講の被服構成実習の授業では、毎年暮れに学びの集大成として教科発表をファッションショー形式で実施し、これまでに13回を数える。前期にウェディングドレス、後期にデザインドレスを課題作品にしており、学生がもつそれぞれの個性と体型を生かしたデザインを製作して発表している。

履修生のなかにはファッションショーを見て、自らも教科発表をやりたいと入学する学生もいるが、入学前に縫製の技術をほとんど身につけていない学生を迎え、教科発表を実現するための指導に年々苦慮している。

そこで本稿はデザインドレスを製作する前の試みとして、ITを活用し[1)]「３次元仮想コーディネートソフト」をベースに、パソコン上でドレスのデザインを発想し、実際にドレスの製作に応用する工程において、若干の教育効果を得たので報告する。

今回は2007年から2017年にかけて学生が製作した、デザインドレスから19点を取り上げ解説する。

２　授業の取り組み

２－１　学生の資質の変化に対応するための手段

小・中・高等学校の学習指導要領の改訂に伴い、家庭科のなかで被服に関する授業が激減し、結果ほとんどの学生が被服の基礎的知識や技術を身に付けずに入学してくる。[2)]

筆者が担当する被服構成実習の正規時間数は、前期･後期、各15週、１コマ半の135分であるが、カリキュラムの時間数では、学生の資質の変化に対応した授業は成り立たない。

２－２　授業改善のためのIT活用の意義

実習授業に対応した取り組みのひとつとして、筆者が担当する「ファッションコーディネート演習」の演習授業で用いている「３次元仮想縫製システム」をベースにして、パソコン上でコーディネートのシミュレーションを可能にしたソフトを活用し、服のデザインをシュミレーションすることができる。

パソコンのソフト機能として「アイ・デザイナー」をベースに「i-D Fit」、「i-D Face」、「i-D Accesory」を活用している。

・　パソコン上で立体の服が作れる。
・　服を着せかえることができる。
・　自分の顔写真を取り込むことができる。
・　服種アイテム40種類、布地の色、柄は2,500種以上。
・　既存の他に実際にドレスに使用する布地を取り込み、パソコン上でデザインすることができる。

応用としてのIT活用

・　作りたい洋服のイメージを画用紙上に描いていたが、パソコンを用いることで、デザインの発想を繰り返し行うことができる。
・　既存のファブリックだけに限らず、学生が製作する布地やパーツなどをパソコンに取り込むことで、デザインがさらに明確な状態になる。
・　学生の顔を取り込むことで、個性を生かしたデザインになっているか確認できる。
・　服を製作する前にデザインの発想をパソコン上で繰り返し行うことで、製作したいイメージをつかむことができる。
・　服のコーディネートをバーチャルに行うソフトを使用しているために、パソコン上で完璧に服をデザインすることは不可能であるが、イメージをつかむことは可能である。
・　短時間で多種多様のデザインをシュミレーションすることができる。

２－３　演習内容

ソフトに含まれるデータ数は、[2)] に示す通りである。

服種はトップスで見るとシャツ・ジャケット・ワンピースの22アイテムであり、ボトムスはスカート・パンツの18アイテムである。

この限られた数の服種のなかで、柄データを活用して布地の色や柄や多種多様の素材を様々にシュミレーションすることで、衣服のイメージがまったく違うものになることがパソコン上で確認できる。

IT授業のメリット

・　パソコン上で立体画像の服をコーディネートできるソフトを取り入れることで、さまざまな色柄の服を着装した状態の立体画像を、簡単に手早く、数多く見ることができる。
・　学生自身の顔を取り入れることで、リアルさが増しイメージがつかみやすくなり、コーディネートがより楽しく行うことができる。

事例１　水玉模様を共通にデザインした場合

図１

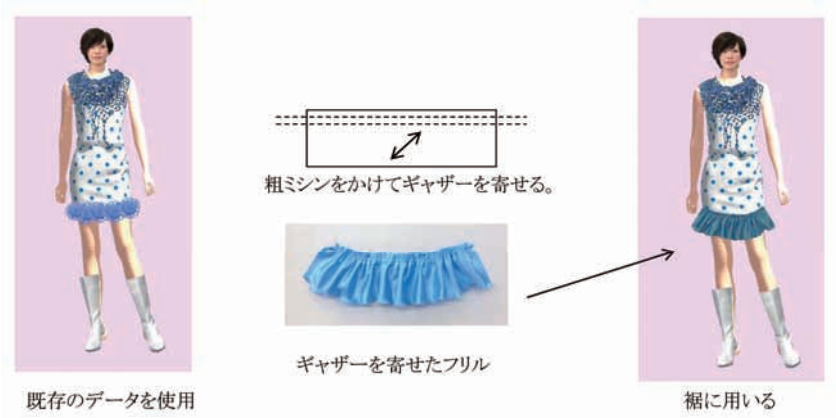


図１－１

既存のデータから、ノースリーブのワンピースに、ブルー・ピンク・赤の色違いの水玉模様を用いてデザインした。既存のアクセサリーから、ネックレスとブローチを用いて、ドレスのデザインを膨らませている。図１で示すが、ブルーのサテン地と赤のアムンゼン、ピンクのオーガンジーを用いて、バイヤス方向に裁断した布地にギャザーを寄せたパーツをつくり、アクセサリーとして取り込みデザインしている。図１－１

ドレスの丈やパーツをつける位置、パーツに入れたギャザーの分量、幅などにより、同形のワンピースであるが、ドレスの印象やイメージが異なることが分かる。

小柄な体型や長身の体型に相応しい、ギャザーやフレアーをつける位置をパソコン上で理解することができる。

写真１

2007年度作品

No. 1

赤の水玉模様のドレスはローウエストのミニ丈のワンピースである。長身の体型を生かしギャザーフレアーをたっぷり入れた３段のティアードスカートにデザインしている。ベアトップの胸元とスカート部位に無地の赤を入れることで、インパクトのある個性的なドレスになった。

No. 2

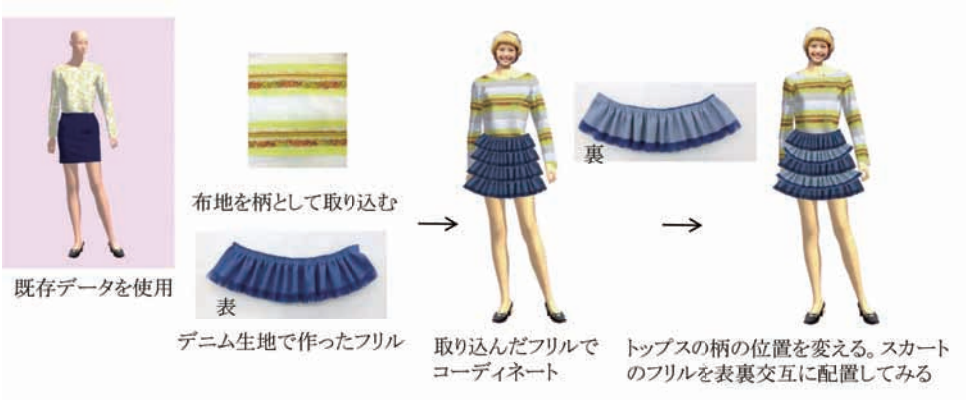
ピンクのドレスはフェミニンで可愛い感じをイメージしてデザインしている。小柄な体型をカバーするためにドレスのトップスにポイントをおいている。ピンクの水玉模様に張り感のある同色のポリエステルオーガンジーを組み合わせ、２枚一緒にギャザーを寄せたパーツをネックラインに飾っている。可愛さを強調するためにドレスの裾にも同じ手法で作ったフレアーギャザーをつけている。

No. 3

ブルーの水玉模様と無地の布地を用いたドレスは、体型を生かしボディフィットのシルエットにデザインしている。水玉模様と同色の布地を２枚一緒にギャザーを寄せ、ドレスのヘムラインにもつけている。ベアトップのショルダーに羽織るショールは、水玉模様と無地の布地を合わせた、リバーシブル仕立てにしている。ショールにも水玉模様の布地でつくったフレアーギャザーのパーツをつけることで、華やかなドレスを表現することができた。

事例２　デニム地とインド綿の生地を共通にした場合

図２



既存のボートネックのブラウスとミニ丈のタイトスカートをコーディネートしている。実際にブラウスに使用するインド綿の花柄の生地と、スカートに使用するデニム地をパソコン上に取り込んでいる。図２で示すが、パソコン上でブラウスのボーダー柄の位置を変化させることで、着用者の個性が生かされているかなど、効果的な位置を求めている。

ボトムスのスカートはタイトスカートからティアードスカートにデザインを変えて、さらに、実際に使用するデニム地を裁断して、片方にギャザーを寄せ、もう一方はフリンジ状にしたパーツを取り込みデザインしている。デニム地の特性を生かし、裏表の織り糸の濃淡を交互に入れてデザインすることで、面白さを表現することができた。

写真２

No.4　　No.5

2014年度作品

No. 4・No. 5

太陽を浴びたひまわりのように、可愛い夏の女の子をイメージしてデザインした２点のブラウスは、模様が同じ赤と黄色の色違いの布地を用いて同じ形にしている。ティアードスカートの６段の切り替え部分につけたデニム地を、裏面と表面で構成することで、インパクトのある可愛さを表現することができた。

事例３　デニム地を事例2と共通にデザインした場合

図３

トップスは既存のシャツカラーのブラウスを着せ、ゴアードスカートとコーディネートしている。シンプルなロングスカートを面白く表現するために、ブローチを用いてデザインをしている。実際に使用する布地を柄として取り込み着せている。事例２の作品と共通性をもたせるために、同様のデニム地で作った花のコサージュをアクセサリーとして取り込み、コサージュの大きさや位置を変えることで、様々なデザインをパソコン上で試すことができた。

写真３

No.6

2014年度作品

No. 6

トップスに使用したブラウスは、コード刺繍が施された綿ローンの生地を用いている。布地のもつ存在感を生かし、トップスはシンプルにして、衿にデザインのポイントを置いている。長身の体型を生かすためにスカートをロング丈にして、デニム地で作った、大･中･小と大きさの違うコサージュを飾ることで、シンプルなスカートをインパクトのある面白さを表現することができた。

事例４　ドレスのデザインは同形にして色を変えた場合

図４

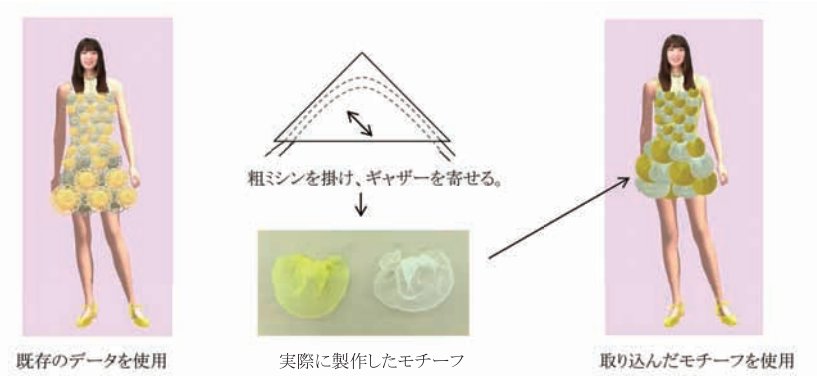


図４－１

既存のノースリーブ・ノーカラーのブラウスにタイトスカートをベースにしてデザインを作成している。ふわふわした可愛いドレスをイメージして、図４で示す既存のアクセサリーからブローチを用いて、ドレスのデザインを膨らませている。ブローチの大きさやカラーを変えバランスを見ている。図４－１に示すが、実際に使用するオーガンジーの布地を用いてモチーフをつくり、アクセサリーとして取り込み、色変更をすることで実際につくるドレスのイメージが明確になる。

No. ７～ No. ９

ふわふわと春風に舞う天使のドレスをイメージしたドレスは、白地を共通に用いて、ブルー、イエロー、ピンクと色調が淡い３点のオーガンジーを用いてドレスをデザインした。

トップスにつけた花びらは104枚のリーフで飾られ、スカート部分はボリュームを出すために、たっぷりとギャザーを入れた土台スカートに、華やかさを表現するために存在感のある大きな花びらを24枚つけてデザインしている。

写真４

No.7　　No.8　　No.9

2013年度作品

事例５　ドレスをデザインする花びらのモチーフを薔薇に変えた場合

図５

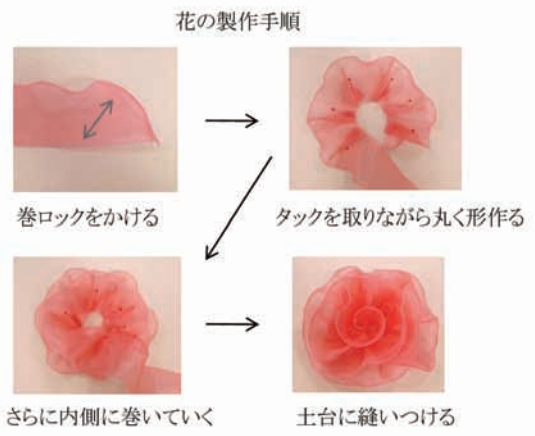


図５－１

事例４を基にして図５で示す、実際に使用するオーガンジーで花をつくり、パソコン上で華やかなドレスをイメージしたデザインを試みた。

透明糸　　ラメ入り糸

図５－２

No.10 ～ No.12

トップスとスカートのすべてを花で埋め尽くしたドレスは、可愛いフェミニンなドレスに仕上がっている。図５－１で示すが、オーガンジーをバイヤス方向で裁断し、一方の布端は細縫いロックミシンで始末している。トップスとバルーン風に広がったスカートに装飾した薔薇の花が立体的に見えるように、手作業で花びらを形つくりスカートの土台布に、透明糸で留めている。図５－２で示すが、薔薇の花びらが美しく華やかに表現できるための試作として、布端を始末するミシン糸を透明糸とドレスと同色のラメ入り糸で比較してみた。

写真５

No.10　No.11　No.12

2017年度作品

事例６　柄のモチーフをデザインした場合

図６

図６－１

既存のノースリーブ・ノーカラーのブラウスとミニスカートでコーディネートしている。
スカートは既存のアクセサリーの中から、マフラーを用いてデザインしている。マフラーを幾重にも重ねてボリューム感を出し、ギャザースカート風にデザインしている。図６－１で示すが、実際に使用す

る薔薇模様の生地から、薔薇のモチーフを切り取り、アクセサリーとして取り込み、スカートにデザインしている。

写真６

No.13　No.14　No.15

2014年度作品

No.13・No.14

ベアトップの２点のドレスはトップスに色違いの生地を用いて、ウエスト位置を若干変えてデザインしている。スカートは黒のサテン地とソフトチュールを重ねてつけている。ギャザーフレアーをたっぷり入れたサテン地のアンダースカートに、トップスの生地から薔薇の模様を切り取ったモチーフをスカートに散らすことで、華やかなドレスのイメージを形にすることができた。

No.15

ドレスは、ベアトップのNo.13と No.14のドレスと共通性を持たせるために、トップスの左ショルダーと右サイドの部位に薔薇のモチーフを散らし、さらにスカートのウエスト部分にペプラムを付けることで華やかさが増したデザインになっている。

事例７　色違いのレース地を用いてデザインをした場合

図７

図７－１

写真７

No.16　No.17

2017年度作品

既存のキャミソールとパンツを合わせている。トップスは実際に使用するレース地を取り込み着せている。パンツは既存の生地からグリーンを合わせているが、トップスのレースに相応しい華やかさを表現するために、パンツの色を最大限に透過し、軽やかさを出しバランスのよさを見出している。

No.16・No.17

トップスとパンツをコーディネートした２点の作品は、同じ柄のケミカルレース地の色違いを用いてデザインしている。パンツはトップスのレースと同色のオーガンジーを組み合わせているが、一見ス

カートを思わせるほど広がったフレアーパンツにして、華やかさを表現している。トップスの着丈はパンツの股下を限度にして決め、図７－１で示すが、切り取ったレースのモチーフをトップスの上部とヘムラインにつけることで、ケミカルレースの豪華さを最大限に生かすことができた。ワイドフレアーパンツで用いたオーガンジーの透け感とバランスよく調和したデザインに仕上げることができた。

事例８　モチーフを用いてドレスのバランスを比較した場合

図８

図８－１

既存のキャミソールにタイトスカートを合わせコーディネートしている。トップスは実際に使用するラメモール刺繍生地を取り込み着せている。図８－１で示す、デザインする上でポイントになる、トップスの切り替え位置やスカートの丈など、実際にドレスを製作する学生の体型を考慮してイメージを膨らませている。

No.18・No.19

ふたつの作品は同じラメモール刺繍生地とベルベット地を用いて、華やかなフォーマルドレスをイメージしてデザインしている。個性と体型を考慮したドレスは、写真８で示すNo.18の場合は、小柄な体型をカバーするためにレースの切替え部位をハイウエストにし、ドレス丈もミニにすることで、可愛らしさを表現している。

No.19のドレスは、長身の体型に合わせてトップスの切り替え位置をノーマルウエストにして、ドレス丈も膝の位置にすることで、落ち着いたエレガントな雰囲気を表現することができた。

写真８

No.18　No.19

2017年度作品

表1　生地の名称と組成繊維

作品 No.	生地の名称	組成繊維
No. 1 ～ No. 3	ジューンソワイエ	ポリエステル　100%
	アムンゼン	ポリエステル　100%
	ポリエステルオーガンジー	ポリエステル　100%
No. 4 ・ No. 5	インド綿パッチワーク	綿　100%
	8オンスデニム	綿　100%
No. 6	インド綿パッチワーク	綿　100%
	8オンスデニム	綿　100%
No. 7 ～ No. 9	ワッシャーオーガンジー	ポリエステル　100%
	ブライダルサテン	ポリエステル　100%
No.10 ～ No. 12	スパークオーガンジー	ポリエステル　100%
	ツインクルサテン	ポリエステル　100%
	バックサテンシャンタン	ポリエステル　100%
No. 13 ～ No. 15	ソフトチュール	ナイロン　100%
	バックサテンシャンタン	ポリエステル　100%
No. 16 ・ No. 17	ケミカルレース	ポリエステル　100%
	スパークオーガンジー	ポリエルテル　100%
	バックサテンシャンタン	ポリエステル　100%
No. 18 ・ No. 19	ラメモール刺繍	ポリエステル　50%　ナイロン 50%
	ベルベット	レーヨン　100%

ま と め

既存のソフトを基にして、実際に使用する布地やパーツを取り込むことで、自分がつくりたいドレスのイメージを膨らませる工程は、限られた実習授業において有効に活用できたものと言える。

同じ布地を用いてデザインを発想する場合、着用者の顔を取り込むことで、個性や体型を考慮した最も相応しいデザインをパソコン上で確認できるため、実習授業に繋げていくための手段として、大きなメリットであることが分かる。

本稿は2007年度から2017年度にかけて製作した作品の中から、８パターンを抽出して、ドレスの解説をしたが、筆者が実施した[3)] 小・中・高校における被服製作実態調査によると、ほとんどの学生が一枚の服を作った経験がないことが明らかになっている。

被服構成実習における技術力の低下を危ぶみ、問題視する声が全国の家政系大学・短大から挙がっている。今後さらに被服教育の現場において大きな課題になるものと思える。

本学に夢と希望を抱き入学する学生を相手に、目標を実現させるための指導は至難の業である。被服構成の経験がほとんどない学生が、先輩たちが創り上げた教科発表を目標にして、夏休みも返上して作品製作に挑んでいる姿は13年間変わらない光景でもある。

短大時代における尊い経験は、挑戦しなければ決して得ることができない糧として、今後の人生において生かされることを願いたい。

ファッションショー発表作品

2007年度　ANAクラウンプラザホテル新潟にて

2013年度　ANAクラウンプラザホテル新潟にて

2014年度　ANAクラウンプラザホテル新潟にて

2014年度　長岡造形大学と合同ファッションショー　（新潟日報　メディアシップにて）

2017年度　新潟青陵大学短期大学　ラーニングコートにて

註

1　本稿は日本家政学会第68回大会名古屋金城学院ポスターセッションの発表内容を加筆修正したものである。

引用・参考文献

1）小川秀子：人間総合学科の特色を生かした授業の取り組みについて一考察　－ ファッションショー作品からみる －　新潟青陵大学短期大学部研究報告37, 25-35.　2007

2）小川秀子：被服構成実習の取り組みについて一考察　－ ファッションショー作品からみる －　新潟青陵大学短期大学部研究報告42, 53-63. 2012

3）小川秀子：ドレスデザインにおいてデザインを効果的に表現するための試み－ ディテールについて一考察 －　新潟青陵大学短期大学部研究報告43, 49-60. 2013